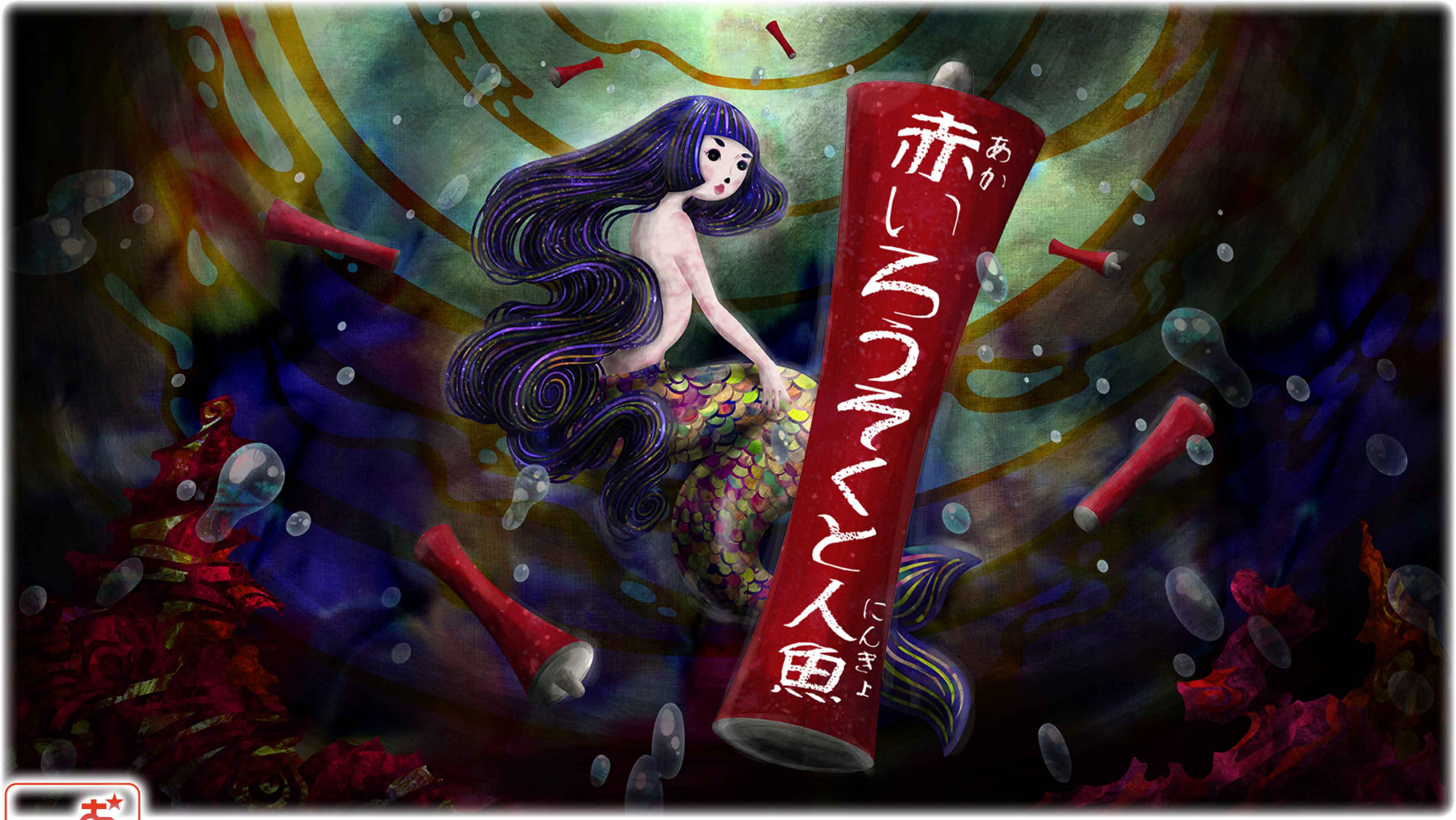
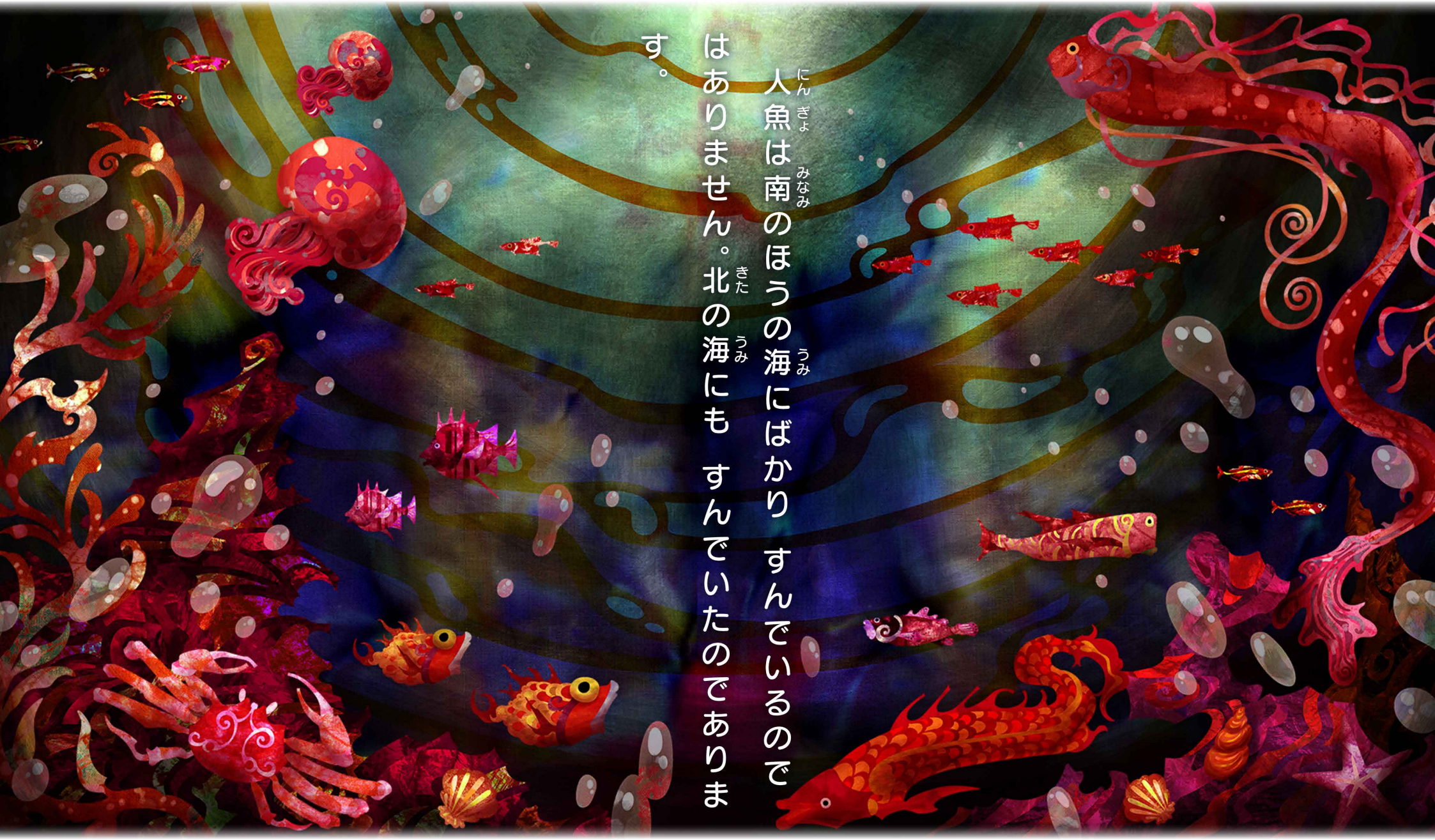


おはなしのくに

作　小川 未明
イラスト　松村 麻郁



人魚(にんぎょ)は南(みなみ)のほうの海(うみ)にばかり すんでいるので
はありません。北(きた)の海(うみ)にも すんでいたのであります。

北ぽうの海の色は、青うございました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、休んでいました。その人魚は、子どもを みごもっておりました。

母人魚「わたしたちは、もう長いあいだ、このさびしい、話をするものもない、海の中でくらしてきたけれど、これから生まれる子どもに、こんなかなしい、たよりない思いはさせたくないものだ。

人間は、この世界のうちで一番やさしいものだと聞いている。一度、人間がそだててくれたら、けっして無じひにすてることもあるまい」

人魚(にんぎょ)は、そう思(おも)ったのでありました。

海岸に小さな町がありました。お宮のある山の下に、小さなろうそく屋がありました。

ある夜のことでありました。ろうそく屋のおばあさんはおじいさんに言いました。

おばあさん「このお山にお宮がなかったら、ろうそくが売れません。わたしたちがこうして、くらしているのも、みんな神様のおかげです。そう思ったついでに、お山へ上がっておまいりをしてきます」

おじいさん「おお、わたしの分もよくお礼をしてきておくれ」

お宮へおまいりをして、おばあさんは山をおりてきますと、石だんの下に赤んぼうがないていました。

（おぎゃあ、おぎゃあ…）

おばあさん

「おおかわいそうに、かわいそうに」

その子は女の子であったのであります。そして胴から下のほうは、魚の形をしていましたので、おじいさんも、おばあさんも、話に聞いている人魚にちがいないと思いました。

おじいさん「これは、人間の子じゃあないが……」
おばあさん「しかし、なんというやさしい、かわいらしい顔の女の子でありましょう」
おじいさん「神様のおさずけなさった子どもだからだいじにしてそだてよう」

子どもは、大きくなるにつれて黒目がちなうつくしい、おとなしいりこうな子となりました。

娘は、大きくなりましたけれど、すがたが変わっているのではずかしがって顔を出しませんでした。

（ろうそくを作る音）

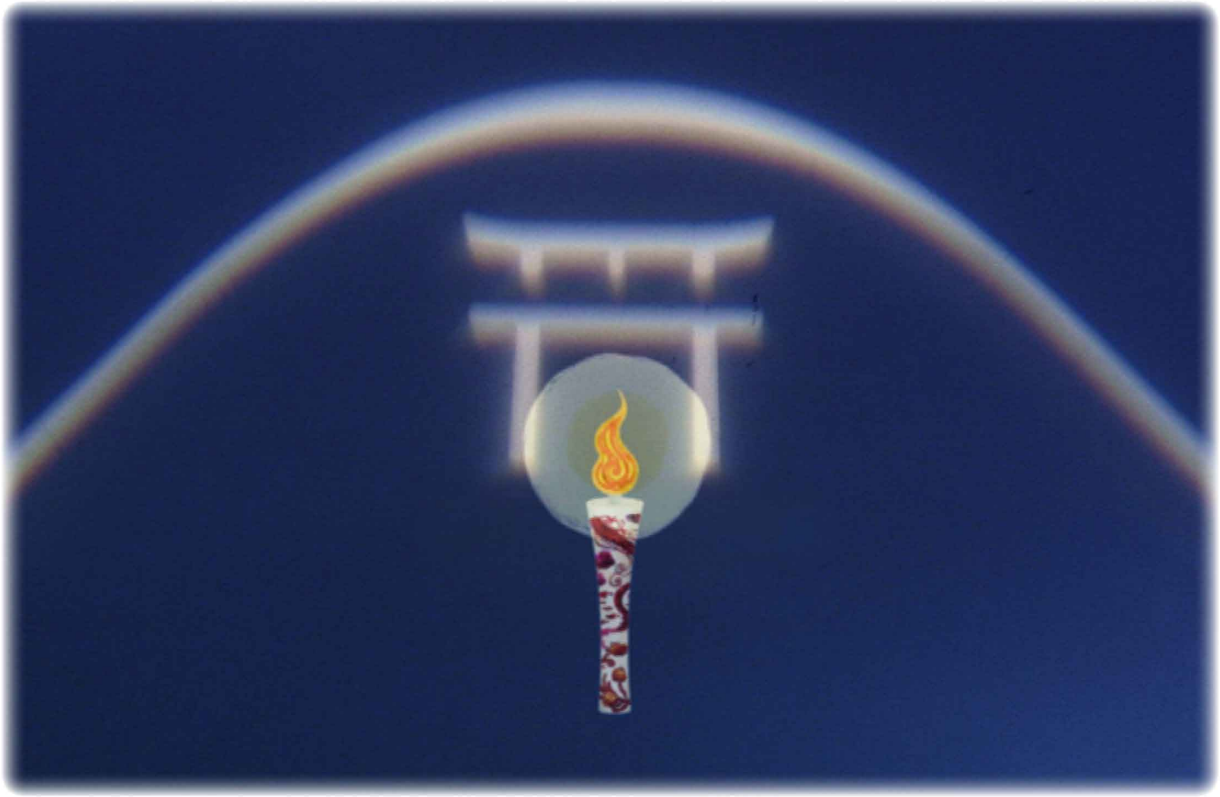
おくの間でおじいさんは、せっせとろうそくを作っていました。

娘は、自分の思いつきで、赤い絵の具で、白いろうそくに、魚や、貝や、また海草のようなものを、じょうずにかきました。

おじいさんは、びっくりいたしました。
だれでもその絵を見ると、ろうそくがほしくなるように、その絵には、ふしぎな力とうつしさとがこもっていたのであります。
おじいさん「うまいはずだ、人間ではない人魚がかいたのだもの」

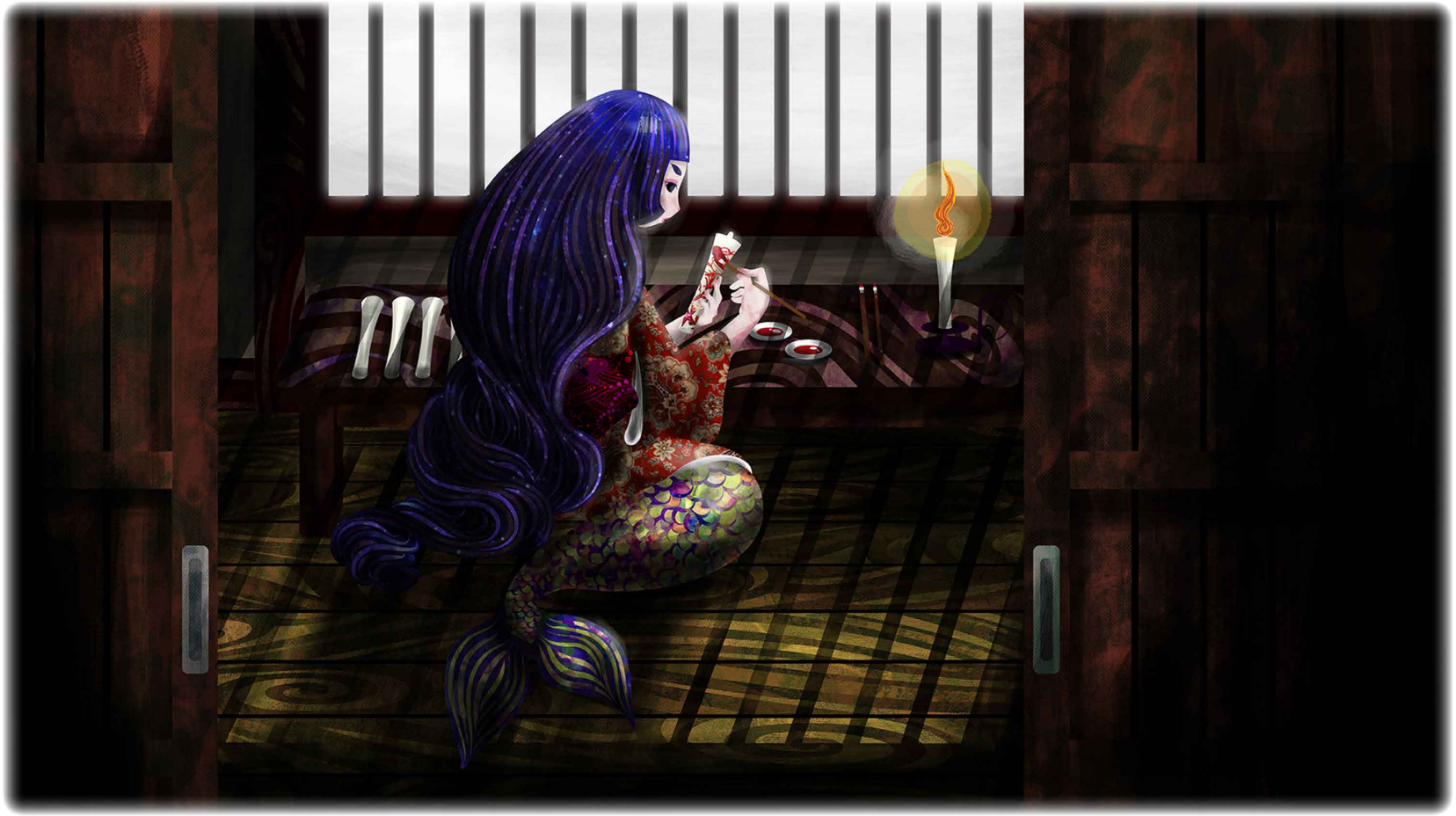
町の人「絵をかいたろうそくをおくれ」と、いって、朝から、ばんまで子どもや、おとながこの店さきへ買いに来ました。

するとここにふしぎな話がありました。
この絵をかいたろうそくを山の上のお宮にあげると、
どんな大あらしの日でもけっして船がてんぷくしたりおぼれて死ぬようなさいなんがないと、いつからともなくみんなの口ぐちにうわさとなって上りました。



町の人「ほんとうにありがたい神様だ」
「ありがたい、ありがたい…」

けれどだれも、手のいたくなるのもがまんして、
一心にろうそくに絵をかいている娘のことを思う者
はなかったのです。



あるとき、南のほうの国から、香具師というあやしい男がやってきました。

香具師
「大金を出すから、その人魚を売ってはくれないか」

おじいさん
「この娘は、神様のおさずけですから、どうして売ることができましょう」

香具師
「ふふん。むかしから人魚は、不吉なものとしてある。今のうちに手もとからはなさないと、きっと悪いことがあるぞ」

年より夫婦は、ついに香具師の言うことを信じてしまい、つい金に心をうばわれて、娘を売ることにやくそくをきめてしまったのであります。

人魚の娘「わたしは、どんなにも働きますから、どうぞ知らない南の国へ売られていくことをゆるしてくださいまし」

月の明るい晩のことであります。いつかの香具師が、いよいよ娘をつれにきたのです。

（ガタガタガタ～）

大きな鉄ごうしのおりを車にのせてきました。

（バタン！）

おじいさん「さあ、おまえは行くのだ！」

（ガチャン！！）

娘(むすめ)は、せき立(た)てられるので、ろうそくをみんな赤(あか)くぬってしまいました。

娘(むすめ)は、赤(あか)いろうそくを自分(じぶん)のかなしい思(おも)い出(で)のかたみに二(に)、三本(さんぼん)のこして行(い)ってしまったのです。

ほんとうにおだやかな晩でありました。

（トントン…）

おばあさん「どなた？」

すると、ひとりの色の白い女が戸口に立っていました。

おばあさんはびっくりしました。女の長い黒いかみがが、びっしょり水にぬれていたからであります。

女は、あのまっ赤なろうそくにじっと見入っていましたが、やがて銭をはらって赤いろうそくをもって帰って行きました。

その夜のことであります。

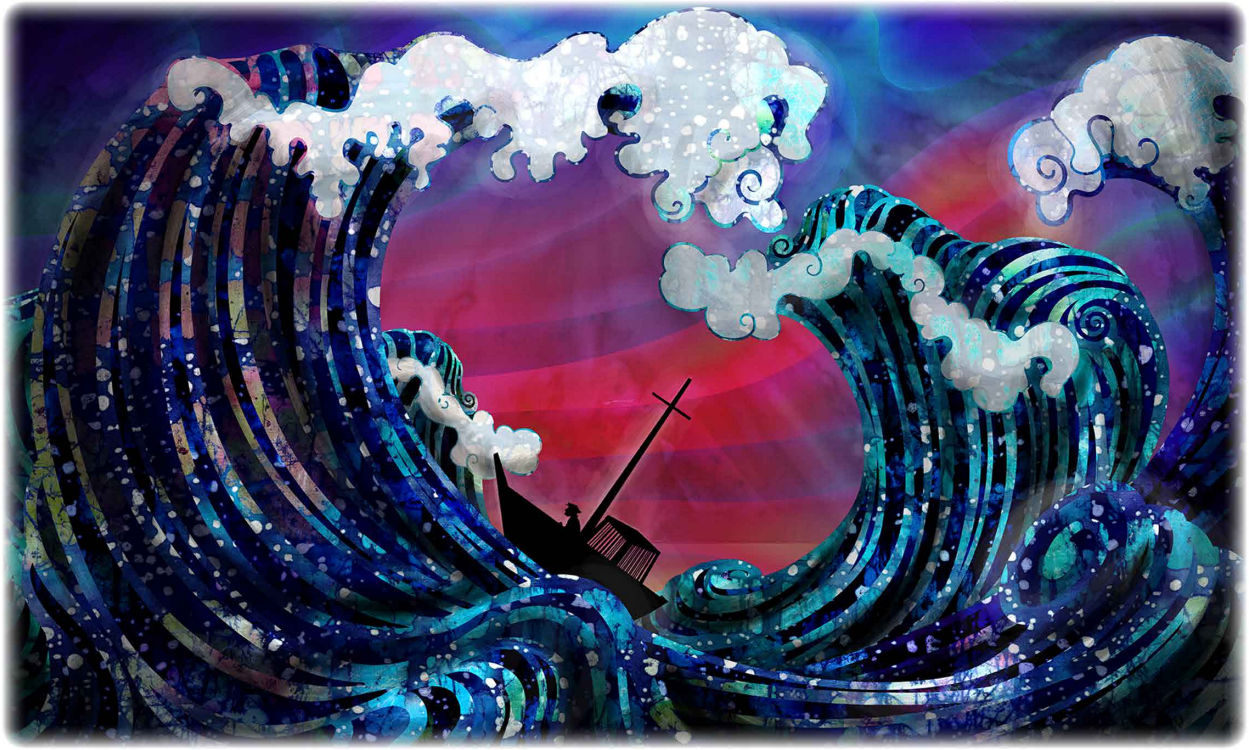
（ピカ、ゴロゴロ！　ザザアー！）

きゅうに空のもようがかわって、大あらしとなりました。

（ザザア～！）

（ゴロゴロゴロ！）

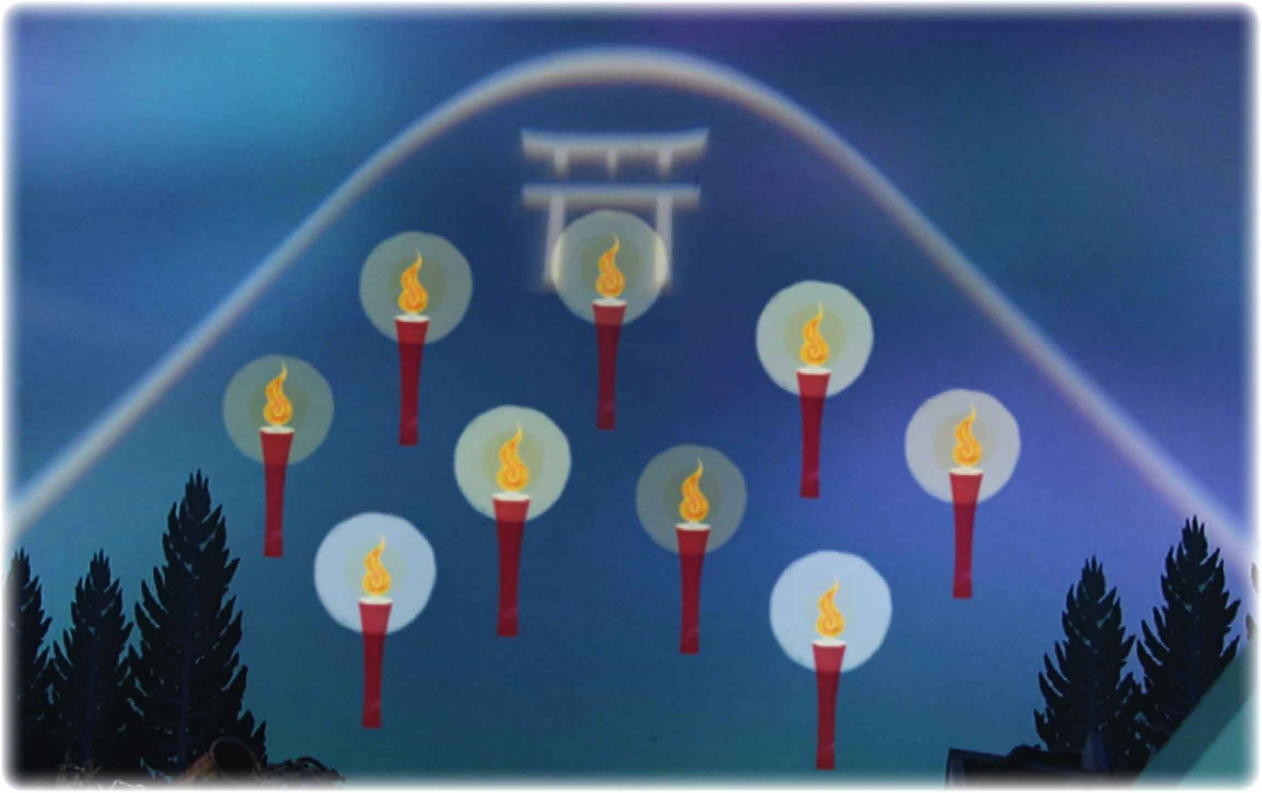
ちょうど香具師が、娘を船にのせて沖あいにあったころであります。



おじいさん「この大あらしでは、とてもあの船はたすかるまい…」

その夜、なんぱした船は、かぞえきれないほどでありました。

ふしぎなことに、赤いろうそくが、山のお宮にともった晩は、どんなに天気がよくてもたちまち大あらしになりました。それから、赤いろうそくは、不吉ということになりました。



しかし、だれが、お宮にあげるものか、毎晩、赤いろうそくがともりました。それを見ただけでも、その者はきっと海におぼれて死んだのであります。

もはやだれも、山のお宮にさんけいする者がなくなりました。

いく年もたたずして、その下の町はほろびて、
なくなってしまいました。

おわり